

環状貝塚の本質―特別史跡指定に寄せて加曽利貝塚を考える―

高梨 俊夫（千葉市立加曽利貝塚博物館）

1. はじめに

平成 29 年 10 月 13 日、加曽利貝塚は特別史跡に指定された。これを機会に、これまでの環状貝塚論を整理し、環状貝塚の本質についての考察を行う。

現代の我々に縄文時代の記憶や伝承はない。また、多くの縄文時代の遺跡は地中に埋没した無意識の生活の痕跡である。しかし、環状貝塚、環状盛土、環状列石、周堤墓等は、その存在を地表上で現代に伝えている。縄文時代の記念物として認識し、縄文人が意識を持って造り、残した遺構としてとらえるべきものであると考える。これら縄文時代の記念物は、すべて円環の平面形態を呈している。形は、概ね機能を反映すると思われ、創造と技術によって生み出されるものである。その創造の背景となるのが象徴性であり、ユングの呼ぶ集合的無意識のなかに存在する普遍的原型であると思われる。現代の我々にとっての円環はどのような原型として作用しているのか。縄文人にとっての環状貝塚は、何の象徴だったのだろうか。

一方、環状集落論では、計画性を持った住居の環状配置については否定的な見解があり、廃絶後の堅穴の大半が廃棄場所として有効利用され、度重なる廃棄場所の移転により必然的に生じたのが環状集落であるという説がある（中山 2012）¹。はたして、環状貝塚は環状集落論で説明できるのであろうか。

私は、かつて環状盛土遺構を有する遺跡について、構築物としての解釈を試みたことがある（高梨 2009）²。縄文時代後期から晩期に形成された環状盛土遺構は、中期からの拠点集落が、後期のある時期に遺跡の中央部分から削り取られた土を環状に盛り上げることで囲い地を形成し、祭祀遺物の増加傾向からも居住地から儀礼場へ変容したことを示唆した。この発想の契機となったのは、千葉県君津市三直貝塚、千葉県佐倉市井野長割遺跡、栃木県小山市寺野東遺跡等の盛土に包含されている土器が中期の土器とともに後期の土器、晩期の土器を包含しながら積み上げられていたことや中央部分がハードローム層まで削平された直上に遺跡の最終段階となる晩期の包含層が形成されていたことによる。これによって、中央部分の窪地は後期から晩期に削平されたことで形成され、削平された土は周囲に盛土されたことがわかった。環状盛土遺構を有する遺跡は、儀礼場をもつ拠点集落であると解釈したのであった。

視覚的には、類似性が感じられる環状貝塚を有する遺跡についても同様の分析を試みることにする。環状貝塚については、なぜ海から離れた集落内に大量の貝殻を持ち込んだのか、なぜ環状になるのか、なぜ盛り上がるのか、機能はあったのか、この疑問の答えが環状貝塚の本質を理解することにつながるものと考え。中でも加曽利貝塚の北貝塚は、中期に構築が開始されている大型環状貝塚の初現のひとつであり、形成の基本思考を解明する鍵となり、また、後期から晩期に形成された南貝塚は、継続する貝塚形成のあり方と終焉を解明するモデルとなる。

さらに、環状貝塚と環状盛土の関連性を考察し、縄文時代における東京湾沿岸域の環状構築物を形成する文化を明らかにしてみたい。環状貝塚を有する遺跡の構造体的解釈によって、「貝塚」遺跡の本質に迫ることができると考える。「貝塚」遺跡の構造は、堅穴建物跡、貯蔵穴、埋葬遺構など集落に必須な遺構とそれらを覆うように、また、包含しながら貝殻を積み上げた「貝塚」遺構で構成される。縄文時代中期

の集落の中から発生し、晩期に至るまで断続的に形成されていることから、狩猟採集民の文化の集大成をみることができるのではないだろうか。

2. 「環状貝塚」遺構の定義

加曽利貝塚をはじめ、多くの「貝層」を有する遺跡は、貝殻の量の多少によらず「貝塚」と命名されている。「貝塚」遺跡のうち、集落に伴い、環状または馬蹄形に貝殻が周堤状に堆積したものを遺跡名の「貝塚」と混同しないように「環状貝塚」遺構とする。

一方、「貝塚」は遺跡の種別、遺構としては「貝層」と呼んでいる場合がある。「貝層」にも環状貝塚を構築した「貝層」と廃棄によりできた「貝層」がある。「貝層」は、貝殻の様々な堆積の単位を示すものであり、それ自体が遺構の場合と遺構を構成する一部の場合がある。

従来、「貝塚」は、環状貝塚、馬蹄形貝塚、点列貝塚、双弧状貝塚、地点貝塚というように貝殻の平面分布の形状による分類がされているが、環状貝塚の基本概念を周堤状構築物とみる立場において、「貝層」を含む現状地形の形状により、環状、馬蹄形、双弧状といった中心を囲い込む形状を示すものを「環状貝塚」遺構と総称する（第1分類）。ただし、点列貝塚でも、連続性を持たないが、環状に展開するものも「環状貝塚」遺構に含めるものとし、「点列型」と分類する。また、完全な環状及び「貝層」の分布範囲で馬蹄形ないし、双弧状を呈するものは、「周堤型」と一括分類する（第2分類）。なお、平面分布による分類には表れない斜面形成のものと台地上への積層によるもの及びそれらの複合したものがある。

遺構の形状からは「環状盛土遺構」と共通するものがあると思われるが、構築思想が同じなのか、単に貝殻を使ったものと土を使ったものの違いなのか、構築方法・遺構・遺物等に共通性があるのか検証する必要がある。

千葉県内の主な環状貝塚を有する遺跡を上記の分類でみると、以下のとおりである（千葉県 2000『千葉県の歴史』資料編考古 1（旧石器・縄文時代）³より抜粋）。

第1分類	第2分類	縄文時代中期	縄文時代後期
環状貝塚	点列型	松戸市子と清水貝塚 香取市阿玉台貝塚 香取市白井大宮台貝塚 千葉市有吉北貝塚 千葉市滑橋貝塚 千葉市蕨立貝塚 市原市草刈貝塚	流山市上新宿貝塚 流山市三輪野山貝塚 鎌ヶ谷市中沢貝塚 千葉市木戸作貝塚 千葉市小金沢貝塚
	周堤型	市川市姥山貝塚 松戸市貝の花貝塚 千葉市荒屋敷貝塚 千葉市有吉南貝塚 千葉市加曽利貝塚（北貝塚） 千葉市月ノ木貝塚 千葉市東寺山貝塚 市原市山倉貝塚 木更津市祇園貝塚	野田市野田貝塚 野田市山崎貝塚 野田市東金野井貝塚 市川市堀之内貝塚 市川市曾谷貝塚 千葉市犢橋貝塚 千葉市園生貝塚 千葉市加曽利貝塚（南貝塚） 千葉市六通貝塚 市原市西広貝塚 袖ヶ浦市山野貝塚

3. 貝塚論の系譜

これまでの主な貝塚論の系譜を辿る。貝塚に関する論考は次のとおりである（加曽利貝塚博物館常設展示資料から引用し、加除修正している）。

年	学説	文献
明治 12 (1879)	貝塚は、野蛮人のゴミ捨て場である。	E. S. Morse 『Shell Mounds of Omori』
明治 20 (1887)	大型貝塚群＝集落群説、千葉市付近は大貝塚が一続きの集落をなすように見える。海産・陸産の資源が豊かで便利だったからであろう。	上田英吉「下総国千葉郡介墟記」『東京人類学会雑誌』第 2 巻第 19 号
明治 21 (1888)	掃き溜め説、貝塚とは掃き溜めであり、貝殻がとくに多いものを指す。	坪井正五郎「貝塚とは何で有るか - 東京近傍貝塚総論 - 」『東京人類学会雑誌』第 3 巻第 29 号
大正 4 (1915)	貝塚ムキミ屋説、貝塚は専門的に貝類をとってムキミとし、諸方面に送ったものであり、居住の場でもあった。	江見水蔭「貝塚について」『人類学雑誌』第 30 巻第 2 号
昭和 10 (1935)	物送り場説、貝塚は物送りの場であり、ゴミ捨て場ではない。	河野廣道「縄文人の謎とアイヌのイオマンテ」『人類学雑誌』第 50 巻第 4 号
	貝塚＝塵捨て場、環状貝塚＝環状集落説、貝塚はゴミ捨て場だが、貝層部分以外に目を向けるべき、環状貝塚は住居跡への貝の廃棄が台地上を巡ってきた。	田澤金吾「貝塚」『ドルメン』昭和 10 年 6 月号
昭和 12 (1937)	堆積堤説、土手状に巡る貝塚を堆積堤と呼称し、貝層が単なる廃棄行為の連続だけでなく、層中に炉跡や柱穴、埋葬人骨など、さまざまな生活面が累積したものであり、少なくともある時期環状上に居住している。	大山柏ほか「千葉県千葉群都賀村加曽利貝塚調査報告」『史前学雑誌』第 9 巻第 1 号
昭和 16 (1941)	貝塚＝聖地・墓地説、貝層堆積自体に墓の意味を持たせる。	ジェラード・グロート「貝塚は捨て場であるか」『民族文化』2-11
昭和 31 (1956)	貝塚＝物送り場説	西村正衛「信仰」『日本考古学講座』第 3 巻縄文時代
昭和 32 (1957)	貝塚＝物送り場説	江坂輝彌「貝塚」『考古学ノート』2 先史時代Ⅱ
昭和 33 (1958)	大型貝塚＝集落説、貝のない中央部の社会的な機能を指摘し、大型貝塚は集落である。	和島誠一「縄文時代」『横浜市史』第 1 巻
昭和 35 (1960)	貝塚＝ゴミ捨て場説、貝塚内集落説、馬蹄形貝塚は住居の分布が必然的にもたらしたもの。	麻生優「縄文後期の集落」『考古学研究』第 7 巻第 2 号
	大型貝塚＝日常消費説（存続期間説）、大規模な貝層は時間の長さを示す。	芹沢長介『石器時代の日本』
昭和 37 (1962)	大型貝塚＝物々交換の市場説、貝塚集落は海産物の市場であり、海陸交通の要衝に当たり物々交換が行われた地域を代表するむら。	酒詰仲男『貝塚の話』
昭和 38 (1963)	馬蹄形貝塚＝馬蹄形集落論	岡本勇「加曽利貝塚の意義」『考古学研究』第 10 巻第 1 号
昭和 46 (1971)	廃棄住居と貝塚（＝送る、もどす場）	戸田哲也「縄文時代における宗教意義について - 田端環状積石遺構を中心として - 」『下総考古学』4
昭和 48 (1973)	大型貝塚＝干し貝加工場説、集落内貝塚論、大型貝塚の貝類は欠乏物資との交換財。周囲の集落が共同で干し貝加工を行った。	後藤和民「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化」『房総地方史研究』
昭和 49 (1974)	大型貝塚＝干し貝の生産集落、貝殻に損傷がないのは茹で干しにしたから、貝層上での焚火が後期に集中することに注目した。	堀越正行「馬蹄形貝塚研究序論」『史館』4
昭和 51・52 (1976・77)	貝塚＝物送り場説	高山純「配石遺構に伴出する焼いた骨類の有する意義」（上・下）『史学』第 47 巻第 4 号、第 48 巻第 1 号
昭和 52 (1977)	質より量説、貝類は利用効率の低い食材であり、大量に採取しなければ必要な食糧としての質を確保できなかった。	鈴木公男「貝塚における貝の総量について」『考古学ジャーナル』170
昭和 57 (1982)	干し貝加工場説に疑問、大型貝塚の中央凹地の形成やキサザや小ハマグリばかりの状況から干し貝加工場説に疑問を唱えた。	今井公子「いわゆる馬蹄形貝塚の中央凹地についての一考察」『論集房総史研究』
昭和 58 (1983)	貝堆積が埋葬行為と切り離せない例があることを指摘し、貝殻が骨質を保存することを縄文人は知っていた筈で、ミイラのように骨格が保存されることを願って、遺体を貝殻で覆ったのではないとした。	前田 潮「貝塚にみる縄文人の精神生活」『歴史公論』No. 94

昭和 60 (1985)	大型貝塚＝集落結集の説、大型貝塚は干し貝加工等の共同作業や共同祭祀を行った集落結集の場として特殊性を強調した。	後藤和民「馬蹄形貝塚の再吟味－東京湾東岸域における縄文集落の様相について－」『論集日本原史』
平成 2 (1990)	集団儀礼用露天囲い地説、(渡辺仁の大型環状列石、環状柱列、環状土籬等の大型環状構築物の解釈 (open-air ceremonial enclosure) によるが、環状貝塚は例示されていないため、これを筆者の解釈として提示した。)	渡辺仁『縄文式階層化社会』人類叢書 11 を参考に筆者が本論で提示
平成 10 (1998)	大型貝塚＝宗教センター説、「貝葬」の存在を指摘し、「貝塚文化」によって埋葬と貝層の関係を説明した。	高梨友子「東京湾東岸域における縄文貝塚と埋葬」『財団法人千葉県文化財センター研究連絡誌』第 52 号
平成 11 (1999)	調味食材説、干し貝加工場説に反論、中期大型貝塚は加工場のイメージは薄く、一年を通じて集落に運び込んでいる。植物食の安定が調味食材としての貝の需要を高めた。	西野雅人「縄文中期の大型貝塚と生産活動－有吉北貝塚の分析結果－」『千葉県文化財センター研究紀要』19
平成 12 (2000)	干し貝加工場説に反論、東京湾東岸の大型貝塚で干し貝と石器石材が交換された証拠は見当たらず、干し貝加工場説は見直しが必要である。	阿部芳郎・建石徹ほか「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造－印旛沼周辺遺跡群の踏査と研究の成果－」『戦台史学』109
平成 13 (2001)	大型貝塚＝共同施設説に反論、環状集落が周辺の小規模な集落の共同作業場であるという図式は成立しない。大型貝塚は共同施設ではない。	西野雅人「縄文時代中期の通年定住集落と周辺遺跡群－千葉市有吉北貝塚と中期遺跡群における居住・生産様式の検討－」『史館』31
平成 17 (2005)	高まり貝層上集落説、加曽利南貝塚における後期中葉以降の貝層と生活面の形成は、環状を意識した集落遺構を示すもので、固定的な空間内で連続した居住活動が累積した結果、環状の高まりが形成されたもの。	阿部芳郎「加曽利南貝塚における貝塚形成過程と集落展開」『貝塚博物館紀要』第 32 号

4. 貝塚論の整理と検証

貝塚論には、大量の貝殻の存在理由を説明するものや周堤状の形態及び構造に関する説明をするもの、機能・性格に関する説明をするものがある。貝塚論の系譜から「環状貝塚」遺構の物理的形成要因及び機能的形成要因にまとめて検証する。(註番号のないものは貝塚論の系譜表の文献を引用・参考)

	物理的形成要因			機能的形成要因		
	大量の貝殻	環状形態	積層構造	廃棄場	儀礼・祭祀場	市場
学説	日常消費説 (存続期間説) 質より量説 貝塚ムキミ屋説 干し貝加工場説 干し貝生産集落説 貝葬説 調味食材説	環状集落説 貝塚内集落説 集落内貝塚論	堆積堤説 高まり貝層上集落説	掃き溜め説 ゴミ捨て場説 干し貝加工場説 干し貝生産集落説	聖地・墓地説 物送り場説 集落結集の場説 集団儀礼用露天囲い地説 宗教センター説	物々交換の市場説

(1) 物理的形成要因の検証

①大量の貝殻

大量の貝殻が存在する加曽利貝塚では、当時の推定海岸線から 5～6 km 離れた集落まで貝を運搬した事実があり、貝塚の体積は少なくとも 1 万 m³をはるかに超えると推定されている(村田 2013)⁴。しかも、千葉市域の貝塚では、総量の 9 割近くがイボキサゴであり、次いでハマグリ、アサリが多い。イボキサゴはハマグリやアサリより沖合に棲息する小型の巻き貝である。その一方、一番手前に生息する汽水域のヤマトシジミは少ない。また、装身具に加工されたベンケイ貝やイタボガキの他、干潟に棲息しない岩礁性のアワビやオオツタノハ、ヤクシマタカラなどの非在地産の貝も若干存在する。

貝の日常消費説(芹沢 1960)は、集落の存続期間が長ければ貝殻の量は増えるというシンプルなものであり、質より量説(鈴木 1977)は、貝は栄養素に乏しいため量を必要としたとするものである。どちらも時間と人口により貝殻量を説明したものである。

流通経済的に大量の貝殻の存在理由を説明するものとして、大型貝塚の貝類は欠乏物資との交換財であり、周囲の集落が共同で干し貝加工を行ったという説（後藤 1973）がある。この説に対しては、大型貝塚は、干し貝の生産集落であり、貝殻に損傷がないのは茹で干しにしたからであり、貝層上での焚火が後期に集中することに注目した肯定する説（堀越 1974）がある一方、大型貝塚の中央凹地の形成やキサゴやハマグリばかりの状況から、干し貝加工場説に疑問を唱えた（今井 1982）ものや、東京湾東岸の大型貝塚で干し貝と石器石材が交換された証拠は見当たらず、干し貝加工場説は見直しが必要である（阿部 2000）として干し貝加工場説への反論がある。

また、大量のイボキサゴは、年間を通して採取されており、イボキサゴのみの純貝層を形成していることから意識的に大量採取、大量消費を繰り返していたことがうかがえる。ヤマトシジミ、アサリ、ハマグリよりも遠くに生息するイボキサゴの大量採取の目的については、植物食の盛行に伴う調味食材（出汁）としての利用説（西野 1999）があり、日常消費説の実態を説明している。

貝殻は、「環状貝塚」遺構を構築するための資材として利用されていることも確かである。純貝層のほかにも混土貝層、混貝土層と呼ばれる土の混じった貝層もあることから貝塚遺構を構築する貝殻は、ストック場所から土と共に移動しているようであり、廃棄物としてよりは資材として扱われている。

貝層下及び貝層中には、人骨が検出されている。多量の貝殻に、埋葬人骨を保存する作用があることを知っていた可能性が指摘され（前田 1983）、「貝葬」を想定している説（高梨 1998）がある。大量の貝殻を単なる資材としてではなく、人骨の保存剤としても意識していた可能性があり、破碎貝層は、より多くカルシウム分を出すためであると考えている（高梨 1998）との指摘もある。

②環状形態

環状になる理由は、環状集落に由来するものとの説明がされてきた。環状貝塚は住居跡への貝の廃棄が台地を巡ってできたもの（田澤 1935）。また、馬蹄形貝塚は住居の分布が必然的にもたらしたものとして貝塚内集落説（麻生 1960）（岡本 1963）や大型貝塚は干し貝加工場であるとし、貝塚は集落の一部に包含される集落内貝塚論（後藤 1973）もある。

これまでの説によると、環状集落の中央広場の規制によるゾーンとして、環状の貝殻の廃棄帯が形成されるということになる。また、環状集落は谷頭地形の縁辺部に展開するものとして、選地の結果、必然的にできるものであるとする見解もある（阿部 2004⁵・堀越 1995⁶ 他）。しかし、集落の展開を俯瞰すると環状の規制から外れるものも多々ある。

加曽利貝塚北貝塚の中央広場部分の3区Cトレンチで加曽利EⅡ式期を中心とした土坑群が検出されている。墓壇の可能性を考慮すべき土坑も指摘されているが、確定していない。また、北貝塚の北東部分は中期には開口しており、後期に閉鎖され環状になったとの報告がされている（千葉市教育委員会 2017）⁷。

環状形態については、連続するもの、開口部のあるもの、点列のものがあるが、貝殻の量によるものであるのか、時間的なものであるのか、関わった人数的なものであるのか、そもそものスタイルであるのか検証することが必要である。

環状形態の形成要因は、形成過程を解明するための発掘調査が必要である。短期に形成されたものなのか、長期に形成されたものなのか、どのような過程を経て現状の形態になったのか、明らかにする必要がある。

また、「環状集落」の形成要因については、集落が切り開かれて居住が開始された当初の住人により、

後世を見越すように計画性をもって住居が環状に配置されたという想定はとうてい容認できないであろう。(中略)、度重なる廃棄場所の移転により必然的に生じたものであろう」(中山 2012)⁸。「廃絶後の堅穴の大半が廃棄場所として有効利用されるという当該時期特有の土地利用のあり方に起因」(中山 2007)⁹するものとの指摘がある。この説に対しては、計画性ではなく規範・規制が伝承される可能性を排除していることに違和感がある。偶然の結果では、環状構成は到底生じえないと考える。まして、周堤状の貝塚の形成は、廃棄場所の移転では説明できない。「計画性をもって環状に配置された」のではなく、「環状を目指した」志向性がむしろうかがえる。

環状形態の遺構の民族例としては、狩猟採集民の公共儀式場は、「屋外(露天)型(Ⅱ)ではすべて円形(弧状、馬蹄形を含む)である。彼等の集落(平面形)が原則として円形であることと対応している。」(渡辺 1986)¹⁰との指摘があり、狩猟採集民である縄文人も原則として円形集落、円形儀式場を志向したといえる。

形態的類似性をもつ環状盛土遺構と比較すると、環状盛土遺構は本来的には「中央窪地遺構」であり、盛土をいかに大きく築くかというよりも、中央窪地からの視覚的高低差が重要だったとの指摘がある(戸谷 2004)¹¹。周堤状の構築物で視覚的遮蔽空間を形成することを目的とする説であり、加曽利貝塚の南貝塚をはじめとする縄文時代後期の環状貝塚に共通する志向であると思われる。

また、環状盛土遺構には、盛土の分節化(マウンドのブロック化)がみられることから、「環状集落の分節構造論(谷口 2005)¹²」をヒントに、分節マウンドの数は血族系統の数を反映していると考え、環状盛土遺構を有する遺跡は、単一血族のみで構成される小さな集落の上位に立ち、いくつかの異なる血族で構成される拠点集落であると指摘した(高梨 2009)¹³。

③積層構造

加曽利貝塚の北貝塚の環状貝塚の断面をみると貝層下の地山に堅穴住居や土坑の断面があり、環状の外側半分から混貝土層、混土貝層を中心に純貝層、破碎貝層、貝ブロックを挟みながら積み上げられ、その後、それを覆うように内側部分を積み上げている様子である。

一方、加曽利貝塚の南貝塚では、貝層下の地山に堅穴住居の断面があり、廃絶後、貝で埋め戻して整地し、再び堅穴住居を掘削し、廃絶後、再度貝で埋戻している重層的な遺構の積層構造が断面でうかがえるという指摘がある(阿部 2005)。

いずれにせよ、加曽利貝塚の環状貝塚は、単なる貝殻の破棄ではなく、積み上げるという行為が確認されている。

また、加曽利貝塚の南貝塚では、後期の貝層や堆積土を掘り込んでつくられた晩期の堅穴住居は、ローム質の土で埋め戻されている(現地説明会 2017)ことから晩期の段階では貝で住居を埋め戻していないことがわかった。このローム質土の供給元が確定できない段階であるが、環状盛土遺構を有する遺跡では、同様の状況を中央窪地からの掘削土で埋め戻していることが確認されており、中央窪地部分を掘り下げることと周辺部分を環状に盛り上げる同様の志向性が感じられる。

これまでは、主に断面観察による貝塚形成過程の考察であるので、面的に貝層中の遺構を確認することや面的に貝層の堆積単位やマウンドの構築方法を確認することができる発掘調査が必要である。また、中央窪地から環状貝塚まで連続した断面を観察できるトレンチ調査によって、現状地形の形成経過を確認することも必要である。貝塚部分の積層状況とともに中央窪地部分の状況も環状貝塚を理解するうえで重要である。

(2) 機能的形成要因の検証

① 廃棄場

掃き溜め説・ゴミ捨て場説は、1879年以来の古典的学説である。モースは、大森貝塚において、人骨までも食人による廃棄物と考えていたため、野蛮人のゴミ捨て場であるとした(E. S. Morse 1879)。しかし、貝塚の調査が進むと埋葬人骨が次々と発見されてきたことから、ゴミ捨て場説には疑問が出てきた。しかし、動物骨などの食物残滓の混入があるので、ゴミ感覚を増補させている。そもそも貝殻はゴミなのか。貝が食材であるだけに貝殻はゴミであると短絡的な判断をされるが、貝塚で多数発見される埋葬において、遺体に貝殻を直接被せている例もあることから、やはりゴミ捨て場説には違和感がある。現代の感覚でゴミは、不浄のものである。少なくとも埋葬遺構を伴う貝塚の堆積物は現代感覚のゴミとは呼べないのではないか。掃き溜め説・ゴミ捨て場説には、ゴミの再定義が必要である。

干し貝加工場説・干し貝生産集落説は、大型貝塚を干し貝生産集落と考える説であるが、貝殻の処分としては、結果的にゴミ捨て場説と変わらない。この説に対しては、「大型貝塚の中央凹地の形成やキサゴや小ハマグリばかりの状況から干し貝加工場説に疑問」(今井 1982)を唱えたものや中期大型貝塚は加工場のイメージは薄く、一年を通じて集落に運び込んでいるので植物食の安定が調味食材としての貝の需要を高めたとの反論(西野 1999)がある。しかし、干し貝加工場説・干し貝生産集落説は、大量の貝殻が存在する説明にはなっているが、貝殻の最終処分の扱いには踏み込んでいない。

② 儀礼・祭祀場

物送り場説は、貝塚には、埋葬人骨、獣骨、土器や石器などの生活道具類、土偶や石棒などの信仰に関わる遺物、竪穴住居跡、貯蔵穴など様々な遺構・遺物が貝殻とともに埋まっている。アイヌ民族には、すべての物に命があり、役割を終えた物を天にもどす物送りの儀式がある。その物送りの儀式の場であったとする説である(西村 1956 他)。

貝殻をゴミとして扱わない学説であるが、この儀式の存在をどのように証明するかは研究を要する。聖地・墓地説、集団儀礼用露天囲い地説、宗教センター説につながる発想である。

山田康弘は、縄文時代に存在した死生観として「円環的死生観」と「系譜的死生観」を挙げている(山田 2015)¹⁴。円環的死生観は「再生・循環の死生観である。この死生観はアイヌなどにみることのできる「もの送り」の思想ともリンクするものである。この世のものはすべて、あの世とこの世を循環すると考える「もの送り」の思想は、縄文時代における根本的な死生観であった。」としている。また、系譜的死生観の特徴は、「自己の存在を(中略)歴史的な系譜のなかに直線的に位置づけることにあり、いわば過去・現在・未来にわたって生命をリレー式につないで行くという死生観である。したがって、往々にしていわゆる祖霊といった概念とリンクし、その概念および死生観の確認行為は祖霊崇拝・祖霊祭祀といった形で発現することが多く、縄文時代の場合もその例外ではないと思われる。」(山田 2015)としている。

環状貝塚は、円環的死生観と系譜的死生観の両者を象徴していると考えたい。環状構造は円環そのものである。この世のものはすべてあの世とこの世を循環するものであり、ゴミではない。また、廃屋葬にみられる多数合葬・複葬例は、大型集落の形成期に集団統合の儀礼として、「集団構造を直接的な血縁関係に基づくものから地縁的な関係性に基づくものへと再構成させる行為であった」(山田 2008)¹⁵と捉え、系譜的な結びつきを重要視する祖霊崇拝へ連動していくものと理解し、「系譜的観点を重視するような祖霊崇拝を行うためには、それに見合った規模の施設が必要であっただろう。」(山田 2015)との指摘から、

環状貝塚がその施設であると推定する。検証するには、埋葬人骨の血縁関係の分析と中央窪地部分の発掘調査が必要である。

集落結集の説は、大型貝塚は干し貝加工等の共同作業や共同祭祀を行った集落結集の場として特殊性がある（後藤 1985）とする説である。この説は、貝層中に多数検出される焚き火跡や土器の大量廃棄を干し貝加工のための共同施設に関するものであり、環状貝塚の中央広場を風通しのよい貝を干す場所であるとしている。これに対しては、環状集落が周辺の小規模な集落の共同作業場であるという図式は成立せず、大型貝塚は共同施設ではないという反論がある（西野 2001）。

集落結集の場は、どのように証明するのだろうか。共同作業場の遺構、共同祭祀の遺構を示さなければならない。加曽利貝塚での共同祭祀については、大型建物跡に石棒、土偶、異形台付土器や玉類が遺存している遺構があり、屋内型の集団祭祀場とみられているが、環状貝塚自体を共同祭祀場とする証拠は示されていない。ただし、発掘調査が進み、集落の規模以上に土器が多量に出土するとか、屋外炉が多数検出されることが検証できたら、臨時的な人の結集の根拠となり得ると考える。

集団儀礼用露天囲い地説は、北米先住民の民族例には、集団儀礼用の円形囲い地で、成人式や追悼記念式を行っているものがあるのでこれを適用させるものである。この説で環状貝塚を解釈すると中央の窪地と周囲の貝塚で閉鎖空間をつくるのが目的となる。この場合、環状貝塚は、祭祀形態による価値観の形成と貝塚形成による価値観の視覚化による祭祀が体系化されたモニュメントとなる。

狩猟採集民の公共儀式場は、「屋外（露天）型（Ⅱ）ではすべて円形（弧状、馬蹄形を含む）である。彼等の集落（平面形）が原則として円形であることと対応している。」（渡辺 1986）¹⁶との指摘があり、また、「墓地と祭祀儀礼場は必ずしも相容れないものではない」とも指摘している。

この説によると環状貝塚による祭祀が、東京湾東岸域に体系化されたことになり、「貝塚文化」を形成した説明となる。よって、「貝塚文化」周縁部の貝の入手ができない地域に環状盛土遺構が形成される必然性も理解できる。より広く「縄文文化」のなかでは、円形の祭祀場及び墓地は、「環状列石」「環状柱列」「周堤墓」とともに体系付けられるのではないかと考える。

なお、縄文時代後期・晩期の大型建物の用途は、屋内型の儀礼場であり、集落内での石棒・石剣・土偶を使用した再生に関わる祭祀が行われた場所であると考えている。それに対し、屋外型の儀礼場となる環状貝塚は、より多くの人の集まる葬送や祖霊祭祀に関わるものであると考えている。

聖地・墓地説、宗教センター説は、「貝塚文化」を「縄文人のからだ」が永遠に保存されることへの願いが生んだ一種の宗教文化であるとし、その文化が絢爛と華ひらく中期、円熟する後期に大規模な宗教センターとして発展したものが大型貝塚である」とする説（高梨 1998）である。ゴミ捨て場説の対極にある説であり、特にイボキサゴが埋葬に深くかかわることを指摘している。考え方としては、物送り場説を人の葬送に特化した葬祭場及び墓地説であるが、環状貝塚の形状についてまでの言及はない。

③市場

貝塚集落は、海産物の市場であり、海陸交通の要衝に当たり物々交換が行われた、地域を代表するムラであるという説（酒詰 1962）である。また、環状貝塚が形成されたムラには、他地域からの搬入品が出土し、石材、貝の装身具、土器など遠隔地からの交易品が確認されている。

オオツタノハなどの海産貝やヒスイの交易が集落間で共有される価値観の形成に寄与したことは明らかであり、「経済的価値を持った天然資源ではなく、社会的な意味や価値を持った交易品が存在し、特別な

遺物の生産や希少な物資の入手を掌握することは、その保有や分配を通じて権力の源泉となり得る」という指摘（前田 2017）¹⁷のあることから、その交易のセンターとなる市場が大型環状貝塚を有する遺跡にあったとすれば、地域集団のリーダーの存在が想定され、拠点集落の性格を持っていたことがうかがえる。

加曽利貝塚では、北陸産のヒスイや伊豆諸島産のオオツタノハ、房総半島には生息していないツキノワグマの牙など社会的な意味や価値を持った交易品が出土している。ヒスイは玉の製品と原石も出土していることから製品の保有と原石の分配を掌握していたリーダーの存在する地域の拠点集落であったことは間違いない。ただし、これらは集落の性質についての説明とはなるが、環状貝塚の遺構としての直接の説明とはならない。

5. まとめ

人間の活動には、創造性と論理性が共存する。結果として残る遺構・遺物に考古学ではひたすら論理的な意味づけをしようとしてきた。しかし、それでも解からない造形については、理屈ではない創造性にかかわるものである可能性がある。だが、ユングの呼ぶ集合的無意識のなかに刻み込まれた普遍的原型において環状貝塚は、縄文人の何かの象徴であるはずである。そこで、大型環状貝塚を有する遺跡の代表である加曽利貝塚の性格についての考えをまとめる。

加曽利貝塚の中期以降の集落は、勝坂式、阿玉台式といった分布地域を異にする土器型式で始まり、加曽利 E 式で統合されていく。明らかに系統を異にする移住者によってムラが形成され始める。血縁者の家族及び親族のみの居住から血縁以外の集団が集合するムラへと発展する過程に環状貝塚が登場してくる。

集落規模の拡大には、血縁以外の集団が集合して地域集団を形成していく過程がある。地域集団形成のためのしくみが環状集落構造と環状貝塚の形成にあるようだ。イボキサゴを大量に採取し、埋葬に使用することで人骨を保存し、再生・回帰・循環を願う祭祀と祖先祭祀を体系化させたモニュメントを築く、これが環状貝塚を有する遺跡の本質であり、その分布による価値観の共有が「貝塚文化」ではないかと考える。そして、貝塚文化の円熟期である縄文時代後期に至っては、貝殻を伴わない環状盛土も登場する。これは、モニュメントとしてのスタイルが伝播していることを意味し、貝を埋葬に使用しなくても祭祀のスタイルが周堤状の構築物と関連することを物語っている証拠である。環状貝塚と環状盛土は、貝塚文化の象徴である。

加曽利貝塚では、この集落構造がおよそ 2,000 年間維持されていく。環状貝塚の発生から終焉まで存続し、最大規模をもっている貝塚文化のセンターである。

これらの予察を検証していくためには、効果的な発掘調査、出土人骨の DNA 鑑定による血縁関係の調査、出土遺物の産地同定、周辺遺跡との比較、環状盛土遺構との比較など総合的な調査研究を行っていかねばならない。

近年、持続可能な社会を目指す取り組みが世界規模で行われている。加曽利貝塚には、今からおよそ 5,000 年前から 2,000 年間持続した社会が存在した。貝塚に残るハマグリの貝殻をみると、南貝塚の形成された縄文時代後期には、大型の貝を選択的に採ることで枯渇を防ぐ資源管理が行われていたことが推測されている。また、貝は、食料としてだけでなく、貝殻を貝刃などの道具や貝輪などの装身具に利用し、究極的には貝塚を構築する資材に利用している。同様に捕獲した哺乳類も食料となるばかりではなく、骨や角で道具や装身具を作り、おそらく毛皮も衣服や敷物として利用されていたと思われる。資源は余すと

ころなく有効利用されていた。

加曽利貝塚が特別史跡に指定された意義は、現代社会の理想とする資源循環型社会、持続可能な社会がそこにあるからではないだろうか。これまでの発掘調査によって、ものを大事にする、自然と共に生きる、戦争をしないという縄文時代のくらしが解明されてきた。だから、加曽利貝塚は日本文化の象徴として重要なのである。

おわりに、環状貝塚の本質を議論する上での基本的な考えを以下に示し、今後の発掘調査及び自然科学的分析の成果による検証に期待する。この仮説は、縄文人は、現実にはないものを想像することができる能力をもち、情報伝達能力をもっていたこと、生存のためには集団化し、効率的な分業体制を志向したこと、集団を維持するためには集団内の精神的拠り所の創出と他の集団と価値観を共有し、婚姻や交易のネットワークを志向したことなどを前提としている。また、加曽利貝塚のような周堤型の環状貝塚は、新石器時代の大型円形記念物として議論していく方向を提唱する。

環状貝塚とは、埋葬と物送りを行う円環的死生観と祖霊崇拜を行う系譜的死生観を象徴した構築物であり、集団儀礼場と墓地として機能した。環状貝塚を有する遺跡は、集団儀礼場と墓地を持つ地域の拠点集落である。拠点集落には、交易権と祭祀の執行権を掌握する地域集団のリーダーが存在し、異なる血族で構成される地縁的集団による大きなムラが形成された。環状貝塚は、貝の採集に適した環境であった東京湾東岸域に集中的に分布し「貝塚文化」を形成した。中でも加曽利貝塚は、環状貝塚の創成から終焉まで存続した貝塚文化のセンターであり、貝塚を構築する主体となった大量のイボキサゴの貝殻は、再生を願い、命の回帰する人の身体が永遠に保存されることへの願いをこめた貝塚形成の本質を語る縄文人の祈りの象徴である。

引用・参考文献（註番号に対応、他は 3. 貝塚論の系譜 の文献による）

- 1 中山真治 2012 「縄文時代中期の集落と廃棄について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 172 集
- 2 高梨俊夫 2009 「環状盛土遺構を有する遺跡の解釈」『千葉県立中央博物館研究報告—人文科学—』第 11 巻第 1 号
- 3 千葉県 2000 『千葉県の歴史』資料編考古 1（旧石器・縄文時代）県史シリーズ 9
- 4 村田六郎太 2013 『加曽利貝塚』日本の遺跡 46 同成社
- 5 阿部芳郎ほか 2004 「縄文時代後期における谷奥型遺丘集落の研究」『駿台史学』第 122 号
- 6 堀越正行 1995 「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚え書き」『史館』26
- 7 千葉市教育委員会 2017 『史跡加曽利貝塚総括報告書』
- 8 1 に同じ
- 9 中山真治 2007 「縄文時代中期の小規模集落—矢川・野川上流域の中期初頭・前期集落を例に—」『セツルメント研究』第 6 号
- 10 渡辺 仁 1990 『縄文式階層化社会』人類史叢書 11 六興出版
- 11 戸谷敦司 2004 「環状盛土遺構私見—井野長割遺跡第 4 次調査の整理を終えて—」『財団法人印旛郡市文化財センター研究紀要』4
- 12 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 13 2 に同じ
- 14 山田康弘 2015 『つくられた縄文時代—日本文化の原像を探る』新潮選書 新潮社
- 15 山田康弘 2008 『生と死の考古学』東洋書店
- 16 10 に同じ
- 17 前田 修 2017 「交易ネットワークの形成—新石器時代における黒曜石・海産貝類の流通—」『季刊考古学』141 号 西アジア考古学・最新研究の動向